

Title	『現代大都市論』に書かれていないこと：社会史と社会学史のあいだ
Sub Title	
Author	熊田, 俊郎(Kumada, Toshio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998.) ,p.50-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集Ⅱ：奥井復太郎生誕105年記念シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『現代大都市論』に書かれていないこと
社会史と社会学史のあいだ

熊田 俊郎

1997年度三田社会学会のシンポジウムは「奥井復太郎生誕100年記念シンポジウム」であった。筆者もコメンテーターとして参加した。筆者のコメントは、今日の社会学で扱われているが『現代大都市論』を中心とする著作に含まれない項目は何かについて、パネラーの問題提起にあわせて言及したものである。検討も不十分なので、詳細は別の機会に譲りたい。ただ、シンポジウムの際に「今日の観点から『あれが不足している、これが不足している』と言うのは時代を考えないものねだりで無意味ではないか」と言う批評をいただいた。この問題を手がかりに古典を読むということについて考えてみたい。

一例を挙げよう。シンポジウムの議論の焦点のひとつは、都市社会の「共同性」への関心である。都市は、ばらばらの個人がマスとして構成している訳ではない。当然個人は、しばしば団体や住民組織の形で都市の構成要素の一部をなし、「共同性」を発揮していると思われる。あれほど都市の多様な要素を検討している本でありながら、住民組織について触れられていない。このような指摘をすると、ないものねだりの批判をしているように捉えられるかもしれない。

奥井著作集第3巻の中に、ドイツ都市発達史に関する論考が収められている。現代大都市とは異質な、また規模もはるかに小さな中世都市が対象となっている。その中世都市は、団体自治のある職能団体が重要な構成要素となっていることを論じている。奥井自身が個人以外に団体、集団、組織に関心を持たなかったとは考えにくいのである。また実体として、『現代大都市論』刊行の昭和15年当時町内会のような住民組織が存在し、戦時体制の一翼を担う形へと変化していた。

「何が書かれていないのか」を問うことは、決して住民組織研究を多く経験した現在の学問の「高み」から、「その後の学問の動向の萌芽が見られるか」を唯一の評価基準として論断することではないのである。あえて言えば、古典は社会学史の素材としても読めるが、同時に社会史の素材としても読むことが可能である。多様な読み方の提案があれば、それだけ古典研究も深めることができるのではないだろうか。

(くまだ としお 駿河台大学法学部)